

「短歌研究新人賞」を読む 谷岡亜紀

「短歌研究新人賞」が発表になった。受賞者は次の二人。

・春の雨降りやむまでを電話のない電話ボックスの中で待つてる

郡司和斗「ルーズリーフを空へと放つ」

・刈りたての芝生が刺さる利根川に選択肢なく並ぶふたりは

中野霞「拡張子になる」

それぞれの連作から私がひかれた歌を挙げたが、まず受ける印象は受賞者二人がたいへん似ていることである。年齢も近い。郡司作品の「待つ」が示すように、二人ともただ何かを待っている感覚。電話ボックスに既に電話はなく、世界はちくちくとお尻を刺してくる。その中で、雨が上がって何か次の展開がやって来るまで「選択肢なく」ただ待っている。〈私探し〉の系譜と言えば言えるだろう。ただ、これだけ似ているならどちらかに絞ってもよかつた気がする。新人賞では選者の側のビジョンもまた問われているだろう。両者とも、素朴で素直で、そして淡い。特に幸せでも不幸でもない。それが「今」の時代の空気と言えはそうかも知れないが、「新人」って、みんなこんなだったっけ。この二人の作品が特に悪いとは思わないが、そろそろ輪郭の確かな、手触りのあるものを読みたい。それは、必ずしもリアリズム系の、人生、生活、私：だけに限らない、失意、妄想、怒り、破壊衝動…何でもいい。そろそろモトリアムではなく、流行りの「生きにくさ」だけでなく、私たちの現実への参加の意志が読みたい。今回、二人とも大学生であるというのにはある意味で象

徴的だが、学生だってモトリアムだけの日々を生きているのではないだろう。そうした中で、候補作では次の作者に注目した。

- ・写真付きの身分証ひとつも無くて私は私で合っていますか
 - ・交通整理するおばさんの厚化粧 どんな半生だったのですか
 - ・柴犬を一匹飼って可愛がり看取った平成だった さよなら
 - ・歳をとる地球は回るコンビニは潰れて選挙事務所が変わる
 - ・閉店の貼紙が好き 会ったことないあなたにも人生がある
 - ・自撮りするカッパル以外無表情マクドナルドの夜は更けゆく
- さくらまりこ「知らなくていい」

西可織「エッシャーの塔」

特に注目した「知らなくていい」のさくらまりこは「家事手伝い」であるという。モトリアムの代名詞とも見える肩書だが、作品はしっかりと「世界」に手を伸ばし、問いかけ、呼びかけ、その輪郭を手探りしている。なお、「心の花」の奥村知世も候補作として挙がっているが、これまでの「心の花」掲載作品の方が良かったと思う。奥村には、もっと密着して「現場」の細部の手触りを歌ってほしい。

最後に「最終選考通過作品」からも注目作を挙げておく。

- ・だとしても生きてゆかねば抽斗の間にひとすじ裂け目を入れて 道券はな
- ・眼に入る汗のぬるさにヒトとして生きるしかなき時間が沁みる 有朋さやか
- ・塾までの道のり以外何一つ知らない街のままなのだろう 藍野瑞希
- ・はちみつがしたたるしたたるたまきはる我の命の果ての遠さよ

端葉月